



# 岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

## 内陸地震に伴う地盤災害の様式と予知に関する総合的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢入, 憲二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/300">http://hdl.handle.net/20.500.12099/300</a>

1. はじめに

中部地方に被害をもたらす地震には、太平洋側の海底に震源をもつ海溝性巨大地震と内陸直下型地震とがある。前者は海洋プレートの沈み込みによる大陸プレートの跳ね返りとして説明されるが、地震の起きる場所と地震の繰り返し周期の両者、すなわち巨大地震の時空分布は、地震の発生メカニズムと共に、プレートテクトニクスのスキームの中で比較的容易に理解し易い。後者の原因もまた、プレート運動によるものであるらしいことまでは理解できるが、その実態は必ずしも明らかでない。内陸地震の時空分布（特に、内陸のどこで起きるのかについて）を、プレートテクトニクスだけで説明するのは容易なことではない。すなわち、太平洋プレートやフィリピン海プレートの沈み込みに伴う内陸部の圧縮だけによるならば、内陸地震はどこで起きてもおかしくない。しかし、現実には、過去の地震の傷痕と思われる活断層やそれらの集合からなる構造線等に沿って起きることが多い。こうした経験則から、内陸地震はこうした活断層が一定の周期で繰り返し運動することによって起きると考える人々が多い。しかし、我々はそうは考えない。地震が起きた結果の地表への表現が活断層なのであって、活断層そのものが能動的に動くわけではない。むしろ、なぜそこに活断層があるのか、そして、活断層が繰り返し動くとするなら、なぜ他の場所ではなくてその場所で繰り返し起きるのが重要である。すなわち、プレート運動と内陸地震の起きる場所との関係は、日本列島を取り巻くマクロなテクトニック環境との関連で考えていくことが重要である。本研究の基本的視点はそこにある。

本研究課題には「予知」なる言葉が含まれるが、これは明日起きる、来月起きるといった意味の予知ではない。次はこの構造線沿いのこのセクターが危ない、このセクターはしばらく大丈夫といった意味の予知であり、時間でいえば数十年～数百年規模の予知である。もちろん、もう少し研究の精度が上がれば数年～数十年まで向上する可能性はある。しかし、それが目的ではない。むしろ、こうしたいわば長期的な予知の中でも、この地域はしばらく大丈夫といった観点からの予知が主たる目的であり、その理由は、内陸地震に伴う地盤災害に対する防災、都市や地域の開発、巨大構造物の建設計画といった比較的長期にわたる開発計画や大規模なインフラ設備に対する効果的な投資の是非や効率を考える場合には、むしろ短期や直前予知よりも上記の意味での長期予知の方がより重要と思われるからである。